



北電の社長、会長として、泊原発を建設・稼働させ、その後は北海道経済連合会（道経連）会長を務めるなど北海道の経済界に大きく貢献した戸田一夫氏と妻の連名の墓が、泊原発を望む村営墓地にある。これまでほとんど知られておらず、生前の戸田氏と、泊村幹部らとの交流を物語る証左ともいえる墓石に刻まれた戸田氏は、稼働しない泊原発とコロナ禍に苦しむ北海道にどんな解決策を授けようとしているのか。

特集

北海道電力第7代社長  
道経連第4代会長

# 『戸田一夫』 あの泊村に

# の墓があつた!!

本誌独占

フリージャーナリスト 黒田 伸



在りし日の戸田一夫氏(2000年頃本誌撮影)と泊村営墓地にある戸田氏夫妻の墓、右上は泊原子力発電所(北電公式サイトより)

## 泊村営墓地に眠る

戸田氏が2006年10月21日に肺炎で死去してから丸14年。泊原発の再稼働が依然として見通せない中、泊村の古老からの一言が戸田氏の墓を知るきっかけになった。「原発が動かねえんだから、墓の中の戸田さんも、さぞ悔しいんでねえかな」

墓とは？ と、よく聞いてみると、海を見下ろす村営墓地の中にあるという。これまで、何度も泊村を取材で訪れているが、そんな事実を知るのは初めてだった。早速、案内してもらったことにした。

泊村役場から車で10分ほどの小高い村営墓地の一番海側に、こ

の地に 戸田一夫 戸田愛子 眠る」と黒御影石に刻まれている。死去後2年ほどして建てられたらしい。道経連の第4代会長として1994年から2000年まで道内経済のトップの座に就いていた。1996年に北海道産業クラスター創造研究会を設立。2001年から北海道科学技術総合振興センター(現・ノーステック財団)理事長を務めた。

泊村との関わりは昭和40年代にまでさかのぼる。昭和44(1969)年9月に北海道、札幌通商産業局、北電の3者による協議で共和・泊地区が原発建設予定地に決定されてから、平成元(19

89)年6月に北海道内で初めての泊原発1号機が営業運転を開始するまで実に20年もかかった。その間にさまざまな反対運動が起き、共和・泊地区だけでなく岩内町など原発に隣接する地区の人々の生活や環境も大きく変化した。

**地域住民との  
膝詰め交渉も**

当時の役場幹部や漁民の代表者らと直接交渉したのが戸田氏だった。

戸田氏は、札幌市出身札幌工業高校から東京工業大学に進み、戦後まもなくの1947年に北電の前身である北海道配電に入社。国の原子力発電政策に呼応するように、北海道への原発建設を模索した。

1977年に北電の原子力部門担当常務、泊発



続きは『**月刊クオリティ**』本誌を  
ご覧ください。

▼ ご購読のお申し込みは ▼

○インターネットでのお申し込みはこちらから  
<http://qualitynet.co.jp/koudoku/>

○お電話でのお申し込みはこちらから

**TEL 011-644-0101**

(9:00 ~ 17:30 土日・祝日をのぞく)